

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあつたのではないかと気づきから使われはじめた言葉です。

# 年の暮れのつ暮れに



①販わうさわらび作業所 ②子どもたちと七輪でお餅やマシュマロを焼いている様子  
③寄付いただいたお菓子や食材 ④具だくさんの豚汁 ⑤ぜんざい、おにぎり

## 心もお腹も温まってる

元日早々、能登半島地震の襲来。日々明らかになっていく被害状況、被災された地域の皆様には、謹んでお悔やみ申し上げます。また、被災された地域で、市民のために奮闘されている地元自治体職員の様子を伺っていますと、他人事ではない辛さを感じます。被災地への応援も、広がっていくと思いますが、真摯に「今、自分たちができること」を考え、行動していきたいと思えます。  
今月号は、孤立対策を目的に去年12月30日に開催した「年の暮れの夕暮れに」(炊き出し)の報告記事からスタートです。今年も、よろしくお願ひします。

# 懐かしい未来新聞

発行：甲賀市  
地域共生社会推進課  
連絡先 内線1356  
0748-69-2155

この企画は、市職員を中心とした有志の「炊き出しがしたい」という興味・関心と、めまぐるしく変化する時代の年の瀬に、プラットフォームを用意すれば、新たな「つながり」や「参加」の形が見えるかもしれないといった期待から生まれたものです。一去年末に続く2回目になります。  
今回は、みんなでeここの協働事業で前回同様さわらび作業所をお借りして開催しました。  
豚汁、おむすびで温まっていたいた後は、バイオリンやリコーダー演奏の余興やけん玉道場もあり、来場者同士の交流も生まれ、ほっこりしていただきました。年の暮れの偶然の出会いが年明けの始まりを感じさせる様子でした。  
市民参加を促すボランティアスタッフは総勢30名を越し、参加者の楽しそうな笑顔に癒され肩の力を抜いて一緒に楽しめました。  
eここのステーションをはじめフードバンクびわこ、市内外の企業様、個人事業主10社様から寄付いただいたお米やお菓子をお土産としてお渡しできました。  
市職員の方々にも多くの野菜や浄財をいただきました。感謝申し上げます。

本号の紙面  
★年の暮れの夕暮れに(炊き出し)  
★居場所の創出応援事業  
★コミュニティコーピング体験会  
★重層物語 シーズン4-3編

### コミュニティコーピング体験会

2023年12月22日(金)、みんながチームになってつながりを増やして、暮らしの悩みを解決するコミュニティコーピング体験会を市職員対象に行いました。  
参加いただいた総合政策部、総務部、市民環境部、健康福祉部のみなさん30名からは、「つながりのある人を知る大切さ」「自分がつながれる人になりたいな」「話を聞くことって大事だな」等の意見が飛び交っていました。

### だれでもチャレンジ けん玉道場

道場の師匠は、学校への行きづらさを抱えた中学3年生。5才から大好きなけん玉を続けており、現在はけん玉道5段の腕前です。  
けん玉を人前で披露した自信につながっています。

先日の(上記)炊き出しの時も、来場者の前でけん玉ワークショップをして、場を和ませてくれました。  
毎月第2、第4月の17時から19時までアルプラザ水口の2階みんなの広場で開催しています。

### 居場所の創出応援事業

#### 新しい居場所が増えました

#### あしたを楽しみ おっちゃんのおむすび商店

甲賀市内に、生活リズムが安定せず学校に通えない児童生徒が増えています。そこで、平日の朝に小学校の隣にある元文房具屋(旧小林商店)で、地域のボランティアが「おむすびとみそ汁」を用意して子どもたちを待ちます。登校前の時間に「朝ごはん」を用意するとともに、不登校児童生徒の居場所づくりも兼ねています。  
毎週(月)7時半～open  
甲南中部小学校前(旧小林商店)で開催しています。

上記2つの居場所に参加希望の方は、地域共生社会推進課にお問い合わせください。

## うまくいき過ぎた重層物語 SEASON 4-3

12月号に続き、『プレゼント』と題して重層物語をお届けします。地域共生社会を理解する助けになれば幸いです。どうぞお楽しみください。

## 前回のあらすじ

地域共生社会をキレイごとだとする律子。それは、隣に住む一人の老人（二郎）でさえ受け入れられぬもどかしさからくるものであった。ある日、悩みを膨らませる律子に追い打ちをかけるように、「早とちりカメムシ事件」が起こった。今まで信頼を寄せてきた自立や成長といった価値観は崩れ、食卓に置かれた熟れた渋柿にいじらしさを覚える律子。

冬休みを前に娘は学校に行かなくなり、二郎は肺炎をこじらせて入院した……。

年が明けても、暮れの憂鬱さを孕んだような天気だった。午後二時を回ったばかりなのに日が落ちそうに暗い。つられて足取りも重く、しかし、それを避けては何事も進まない予感があった。二郎の入院先まで娘を連れてやってきた。

面会制限は随分と緩和されているだろう、高を括って来たのがよくなかった。親族でもなく、ましてやまだ幼い娘の面会は許されず、二郎に会って謝る機会さえ与えられることはなかった。いったいどれほどの人間がこのような情けない思いをしたのだろうか。人と人とのつながりに入り込むウィルスがまだそこらへんに潜んでいるようで不気味だった。肩すかしをくらったうえに、不穏な空気までしょいこんでしまい、まるで初詣で凶を引いたような気分となった。

「売店でジュースでも買おうか」

普段より調子を上げて律子は言った。消毒の臭いがただよう廊下を、娘と手をつなぎ、わざと大きくぶらぶらさせながら歩いていると、すれ違いざまに声をかけられた。

「あら、りっちゃんじゃないの」

「……恵子ちゃん」

二郎の一人娘である恵子が、年末に帰省し二郎の見舞いに来ていたのだ。恵子は四つ年上で、幼い頃はいつも一緒に遊んでいて、よく姉妹に間違えられたものだ。互いに四十を過ぎれば同世代で片付くが、律子が小学六年生の時に、恵子は高校生になったわけで、その頃から学校や部活動など暮らしのリズムも合わなくなり、隣に住んでいながら顔を合わすことはほとんどなくなっていた。それに、律子が実家を早く出たかった理由を恵子が少しばかり預かっていたのだ。

「恵子ちゃんを見習って家のこともちゃんとしなさい」「県内一の進学校に行ってるんだって」「あの子がうちの子だったからねえ」

また、耳元で母親の声があった。

「りっちゃん、どうかした？」

のぞきこむ顔はちっとも変わっていない。フリではなく本当に心配してくれているんだと思える顔。恵子に付き添われるようにして院内の食堂に入り、奥の方の窓側の席に腰をおろした。外を見ると、冬枯れの景色にプラタナスの木が寒そうに揺れている。

こんなときの恵子は、せかすことも、興味本位に質問することもしない。昔から、ただ傍にいる人だった。それだから、いつも安心して話してしまう。

「実は、二郎さんに申し訳ないことをしてしまって……」

そう切り出すと、止まらなくなった。

早とちりして二郎に嫌な思いをさせたカメムシ事件に始まり、東京から実家に戻ってからうまくいってないこと、地域共生社会の実現だなんて言いながら、隣に住む二郎でさえ受け入れられないもどかしさ、冬休み前から娘が学校を休んでいること、母から比較されたことで、実は恵子を疎ましく思っていた過去……。

話し終えたあと、二郎や恵子のことまで悪く言ってしまったと気づいた。「……なんか、ごめんなさーい」

目の前の相手が恵子だったことに、はじめて気がついたように言った。「謝らなくなつていいの。りっちゃんは昔から、周囲の目を気にして我慢ばかりで、言うことになったらため込んでたものをそっくりぶちまけるんだから。そう、今みたいに泣きながらね」

恵子は懐かしそうな顔をしてハンカチをさし出した。

このあとで恵子が話してくれたことは、予想していたものどちがっていた。「私たちが、きつと時代に翻弄されているところがあるの。親からも先生からも、個性を伸ばせだとか言われて、気付いたら競争させられていて。良い大学や会社に入ることが唯一の成功みたいだね。私だって、りっちゃんから東京で頑張ろうとした頃、りっちゃんを見習いなさって、親に言われたんだから。追いつけ追いつけって教えておいて、今さら、みんなで支え合いましょうだなんて言うんだから。その地域共生社会ってやつが解釈がスッキリと出来ないのは当たり前。だって、二律背反なところがあるんだから」

律子の母も、娘がこの古臭い地縁共同体から抜け出すことを願いつつも、都会的な暮らしに馴染み、知的で文化的な女性になっていくことに、心を閉ざすような一面をのぞかせていた。

「それでも、二郎さんを疑って傷つけたことは、時代のせいではなくて私が……」

「りっちゃんは、小さな美しいことが折り重なって地域共生社会ができあがると思ってる？」

恵子はそう言って続けた。

実を言えば、律子の母と二郎は昔から反りが合わなかった。互いにやることなすことの一つひとつがとにかく気に入らないといった具合で、双方の不満のあれこれ呼び名に言い換えれば、「感謝の気持ちを知らない女」と「デリカシーのない男」だったのだ。思い返せば、頻繁にかかってきた母からの長電話は、たいていそういった小言で満たされていた。

「別に仲良くやらなくてもいいじゃない。もちろん愛する必要もないし。相反する者や、不快な隣人をどう受け入れるかってことよ」

恵子は本当に、さりとて言った。

傷つけられて、イライラして、傷つけて、憂鬱になって、そういったドロドロした間柄に巻き込まれようとも、つながりを遮断されるよりは、良いかもしれないと思った。

病院の玄関を出ると、もやもやがきれいに吹きとんだように晴れていた。「おんなじ色だー、おじいちゃんが言ってた、あの変な名前の花」

娘は青空をゆびさして言った。

オオイヌノフグリ、名前とは相反して大好きな花。

律子は空を見上げたまま、「きつと、大丈夫」と口の中で呟くと、どういふわけか不意に涙が溢れた。

律子の前を駆け、空へとジャンプする娘はキラキラと光っていた。

(作・中井 浩喜)